

## マツ

牧 幸 男

マツに抱く気持は、洋の東西を問わず尊敬の念があるからかもしれない。中国では古くから「松柏の姿は霜を経るもなお茂る」ものと見なし、老いてもなお樹勢の盛んな松の木を「百木の長」として讃え、不老長寿の夢を託す格好のものとしてきた。我が国でも風土植物としてのマツには、薬物利用をはじめ様々な分野で、中国の松に託されてきた「神仙思想」（古代中国で、人の命の永遠であることを神や仙人に託して希求した思想）が投影されていると思われる。

日本人は松を古来大切にしてきた。マツはまつ「待つ」であり、何事が期待すること、望みをかなえことで、希望を持つことに通じさせている。マツを年の初めに門松として使うのは年初めに一年が良き年であるよう祈りを託すからである。お正月には門松がよく似合う。マツをお正月に飾るのは、品格があるからと言われている。恐らく、春夏秋冬一年を通し濃い緑で炎暑にも風雪にもめげない姿に、先祖は「神性靈性」の宿木と位置付けたのであろう。また、対をなしている二本の針葉は枯れても離れず、夫婦和合の願望もあるようだ。マツ葉は2葉が着いたままで落葉するが、<sup>ゆずりは</sup> 樅や柏の葉などと違って年々更新せず、アカマツでは2～3年、クロマツでは3～4年で替り、葉の寿命が長いのが特徴である。

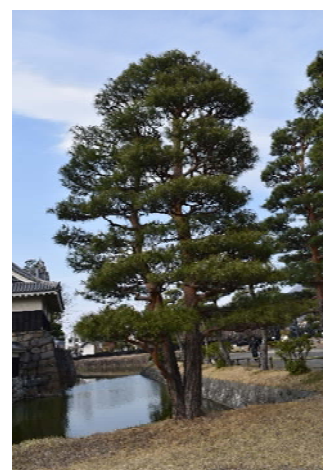
マツの語原についての定説はなく、様々な説が伝わっている。「松」の字を分解すると木偏に公の字を当てている。爵位を示す階級に「公、候、伯、子、男」があるが、この中で公が一番位が高い。中国の詩人王安石（1021～1086）は「松柏は百木の長なり。柏は伯に通ずるが、松は公で樹木中、君公の地位最高のもの。」と述べている。日本でも謡曲の『高砂』には「松は万木に秀れて十八公（字を分解）のよそおい千秋の緑をなし古今の色をみず。」とあり、『徒然草』（1331頃）の139段では「家に有りたき木は、松、さくら。松は五葉もよし。」と延べ、日本人の松に寄せる気持を表している。身近では俗謡に「うれしめでたの若松さまは、枝も栄える葉もしげる。お前百までわしゃ九十九まで、ともにしらが生えるまで」と詠われるように、多くの人に松は愛されてきた。中国の『梁書』（502～567）に『神農本草経』（250～280頃編纂）を整理し、『本草経集注』（500年頃）を著した陶弘景（456～526）は「特に松風を愛し、院の庭に皆松を植う、毎のその響きを聞き欣然として楽しみとなす。」と記述している。わが国も中国も松に対する気持ちは共通している。

子供の頃、お正月に飾る門松について、父から「松迎え」（松を切る）は12月13日以降、松を飾るのは23日以降28日まで、そして29日に飾るのは丸松（苦松）、31日に飾るのは一夜松（誠意のないこと）だから、覚えておくよう教えられた。私は、このような伝承を教えてくれた父の年齢より、はるかに歳を重ねてしまったが、日本古来の風習は大切にしたいと思っている。

マツは主として北半球に広く分布し、世界に約100種生育している。わが国では海拔0mから3000mの高地の各地に生育、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツ、ハイマツ、ヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、アマミゴヨウの7種が原生種である。マツの葉数は2・3・5・8葉が基本数であるが、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツは2葉で、その他は5葉で、3葉は存在していない。特に多く生育している種は、アカマツとクロマツである。アカマツは幹が赤く葉は細く軟らかで淡緑色、全体的に女性的な感じがするので



撮影：松本スカイパーク



めまつ 雌松と呼ばれている。一方、クロマツは樹皮が黒ずみ葉は強剛・濃緑色、全体的に男性的であるので<sup>おまつ</sup>雄松と呼ばれている。生育環境は主にアカマツは山野に、クロマツは海岸近くに分布している。庭木として多くの人がこの木を選ぶのは、生長が遅いこと、姿が美しいこと、末代まで栄えるとの縁起を好むからである。

マツは私たちの日常生活と関係深い植物であった。古くは『古事記』(712)の日本建命の一本松と太刀の物語が日本で最初の松に関する記述であり、『万葉集』(629~759)には79首も選ばれている。『万葉集』の特徴は、松 松の木 待つ、松原 松風 松蔭 浜松 結び松 など様々な表現で記載されている点である。通常植物が歌題に詠みこまれる時は、植物名のみの場合が多いが、マツの多様な表現は、私たちの生活と深い結びつきがあったことを示している。

住の江の 松を秋風 ふくからに 声うちそふる 沖つ白波 大河内躬恒  
線香の 灰やこぼれて 松の花 松尾芭蕉

名前の由来は、神が木に天降るのを待つ(マツ)、神を祭る(マツル)から、あるいは霜雪を待っても何の変化も起こらないから「マツ」、樹齢を長く保つから「モツ」が「マツ」に転化したなどの説がある。別名も数多く、一部を列挙すると、朝見草 色無草 翁草 鏡草 五大夫 白雲草 琴弾草 涼暮草 玉帯 手向草 千枝草 千代木 千代美草 常盤草 時見草 寝覚草 初見草 延喜草 久木草 木公 物見草 百草 夕影草 夕見草等多くの別名が伝わっている。

学名はアカマツが Pinus densiflora、クロマツは Pinus thunbergii である。属名は pin がケルト語の山を示し生育場所を示し、種小名はアカマツが dens (密集した)、flor (花) で花の咲く姿、クロマツは日本の植物研究者でスウェーデン人のチュンベリーの名前である。

薬用に松は、中国の「道教」を形成する基本要素の一つである「神仙説」に選ばれているよう、非常に古い時代から使われてきた。使用部分は樹皮、瘤 葉 花粉 実、松脂、材とあらゆる部分が利用されてきた。詳しい利用方法は省略するが、現状は生薬名を「松脂」と呼び、水蒸気蒸留の留液を日局のテレピン油、残留物を日局のロジンに利用している。冷え性の方は、松葉を袋に入れ風呂に沈め、重曹(NaHCO<sub>3</sub>)を3g程投入すると二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の泡が発生し、体が温まる。

身近に存在したマツには、古くから伝えられている薬用酒があるがその一部を紹介する。

- ・「松花酒」(鼠尾のような松花を細かく刻み、絹袋に入れた物を白酒の醪に納める。3日後絹袋を引き上げ、酒を漉す。) : 健胃、通経、利尿、健胃
- ・「松液酒」(大きな松に坑を掘り缸を置き、津液(生松脂)一斤を採る。糯米5斗と麴を加えて醸し、酒にして飲む。) : 一切の風痺(手足のしびれる病)、風邪
- ・「松節酒」(松の瘤を煮て得た液を酒の仕込水として用い、米と麴をもち凍て酒をかます。) : 冷え性、筋骨が曲がって痛む者



その他、マツの根元には漢方生薬の用薬マツホド(茯苓)が生育する。茯苓は日本薬局方収載に記載されているサルノコシカケ科マツホドの菌核を乾燥したもので自然に枯れたアカマツやクロマツの根元にも寄生するキノコである。

また、松葉と松脂は山人の不老長寿の食べ物として知られているが、松葉を入れた粥は精力増進に役立つ、同じく松葉酒は中風、脚気、でき物に効あり伝えられている。その他、松実、花は不老長寿の薬として伝えられている。



生薬(茯苓) : 長野市豊野産

マツ材は、棟、梁、土台その他建築材に使われるが、松脂が多く腐りにくいことから、橋材や杭に良く利用する。特に、昔は燃料として好まれ、その心材は灯火用として松明に使われた。

花言葉は、不老長寿、向上心、永遠の若さ、勇敢等である。